

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Relation between participant status and
verbal/nonverbal behavior in co-construction

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ザトラウスキー, ポリー, SZATROWSKI, Polly メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002029

共同発話における参加者の立場と 言語・非言語行動の関連について

ポリー・ザトラウスキー
(ミネソタ大学)

キーワード

参加者の立場, 非言語行動, 共同発話, ワキの情報提供者, ワキの協力者

要旨

「共同発話」とは、2人以上の参加者によって作り上げられる名詞句や節、単文、複文である。実際の日本語の談話から収集した共同発話50例を分析し、共同発話は、1) どの参加者の立場から作り上げるのか、2) どの参加者に、どのような行動によって共同発話として認められるのか、3) どのような非言語行動によって作り上げられるのか、について考察した。共同発話に伴う非言語行動の特徴として、後の発話者は先の発話者の「図像的な動作」からその表現意図を予測し、共同発話を成立させること、先の発話者は共同発話の成立を認めるのに、後の発話の繰り返し、同意、うなずき等を用いていること等が観察された。従来の話し手・聞き手という二分法にかわり、新しく談話の参加者を発話機能の使い分けと視線により「マトモの情報提供者・協力者」と「ワキの情報提供者・協力者」と分類し直すことで談話における参加者の相互作用の複雑な面が浮かび上がった。

1. はじめに

本研究の目的は、「共同発話」の成立の過程を参加者の立場と言語・非言語行動の面から解明することである。ここで「共同発話」と呼ぶのは、(1)のような2人以上の参加者によって作り上げられる名詞句や節、単文、複文等である。

(1) は、勧誘者Bが友人Aを飲みに誘う電話による談話の一部である。58Aの「けども」で終わる従属節を重ねて、59Bで「また行くのはめんどくさい?」という主節を付加することによって、AとBが共同して一つの複文を作り、Aの断りを表現している¹。

- (1) 58A 行ってもいい//んだけども、 (情報提供)
59B また行くのはめんどくさい? (情報要求)
(ザトラウスキー1993: 別冊資料16)

本研究では、共同発話に下線を引いて示し、58Aのような発話を「先の発話」、59Bのような発話を「後の発話」と呼ぶことにする。

バフチン(1952-53/1988)は、聞き手について以下のように述べている。

私たちが話者として振る舞えるのは、話し手と同等に能動的な聞き手がいるからである。その聞き手が話し手の発話を引き取り、話者の発話に終わりを与えてくれる。

(茂呂1999: 101)

参加者の立場を考察する際には、「聞き手性 (hearer-ship)」がどのように示されるのかが問題となる (Goodwin 1981, Heath & Luff 1996, 茂呂1999)。Goodwin(1981:3)によれば、聞き手は、「ターン (turn)」²をとっている話し手以外の参加者と定義される。しかし、話し手・聞き手という二分法では、聞き手はただ聞いているだけで発話しないように受け取られるため、適切ではない。複数の参加者が同時に話すことはよくあり、話しながら聞くことができるのである。実際の談話の中では、参加者は相互に深く関わり合い、話し手・聞き手というようには簡単には区別できず、また、区別しない方が実際の談話を動的に考察できる。したがって、本研究では談話の相互作用の中の参加者の新しい分類を考えたい。また、参加者を分けて考えるターンという単位よりも、二人以上の参加者の発話が組合わさってできる「話段」の方が、談話の参加者の相互作用を分析するのに適切であると思われる (ザトラウスキー1991, 1993)。バフチンも聞き手を「能動的」な存在として見ている。つまり、聞き手は発話しないで、ただ単に黙って聞いている存在ではないと考えているのである。

(2) 情報提供者

- ①注目要求
- *②談話表示
- *③情報提供
- *④意志表示
- ⑤同意要求
- ⑦単独行為要求
- ⑧共同行為要求
- ⑨言い直し要求
- ⑩言い直し
- ⑪関係作り・儀礼
- ⑫注目表示 (j, k)
 - j. 同意
 - k. 自己

協力者

- *⑥情報要求
- ⑨言い直し要求
- ⑩言い直し
- ⑪関係作り・儀礼
- ⑫注目表示 (a ~ i)
 - a. 継続
 - b. 承認
 - * c. 確認
 - d. 興味
 - e. 感情
 - * f. 共感
 - * g. 感想
 - h. 否定
 - i. 終了

本研究では、参加者に対して (2) に挙げた発話機能³によって認定できる「情報提供者」と「協力者」という用語を用いて分析する。「話段」とは、談話の参加者が相互に協力し合って、それぞれのコミュニケーションの目的を達成しようとする過程で生じ、談話の参加者の目的による話題、発話機能、音声面の特徴から認定される動的な単位である (ザトラウスキー1991, 1993)。(2) の左側に示した〈情報提供〉を含む主に提供・表示する発話機能を用いる参加者を「情報提供者」、右側に示した主に〈情報要求〉や〈注目表示〉等の受容的な発話機能を用いて、情報提供者と協力して話段を作り上げる参加者を「協力者」と呼ぶ。話段は、情報提供者と協力者という談話の参加者の役割が相互に入れ替わる形で作り上げられる⁴。情報提供者のみが実質的な発話をするのではなく、協力者も実質的な発話をすることもある⁵。本研究は、参加者が共同で作り上げる談話

構成要素としての「話段」の単位の認定基準を考察する研究の一部である。

「共同発話」は、「話段」またはその一部を構成する単位であり、主に(2)の*印を付した、左側の②〈談話表示〉、③〈情報提供〉、④〈意志表示〉と、右側の⑥〈情報要求〉、⑫〈注目表示〉のうちのc.〈確認〉、f.〈共感〉、g.〈感想〉とが組合わさった形で見られた。例えば(1)は③〈情報提供〉(58A)と⑥〈情報要求〉(59B)の組合わせとなっている。

(3)は、テレビの対談番組の例である。司会者TがゲストKの幼少時の冒険談について尋ねている。対談番組では、司会者が視聴者と同じ側に立ってゲストに尋ねたり、言った事を聞いたりする聞き役(協力者)として参加する一方で、視聴者に対して、ゲストとともに情報提供者として話すこともある。(3)では、Kが126Kで⑤〈同意要求〉、128K~131Kと133Kでは③〈情報提供〉を発し、情報提供者の役割を果たしているのに対して、Tは127Tと134Tでは協力者(受容的発話機能)としての役割を担っている⁶。しかし、共同発話を完了する132Tでは、Tは一時的にKの〈意志表示〉をすることでKの立場からKの情報を提供している。

- (3) 126K 補助付きの自転車、最初に乗るでしょ? 〈同意要求〉
127T うん。 〈共感〉
128K で、補助なしを、補助なくして、 〈情報提供〉
129K 乗れたのが、その時初めてで、 〈情報提供〉
130K で、あまりにも嬉しくて、 〈情報提供〉
131K じゃあ、どっかそっちの親父の会社のほうまで、 〈情報提供〉
132T 行っちゃおう。 〈意志表示〉
133K 3時間ぐらいかけて。{笑い} 〈情報提供〉
134T すーごい。 〈感想〉

(佐久間・杉戸・半澤編1997: 共通資料30; 下線と右側の発話機能は筆者が付したもの)

(3)では、131K「じゃあ、どっかそっちの親父の会社のほうまで、」に対して、132TでTが「行っちゃおう。」と子供のような声色で言い、2人でKの〈意志表示〉の共同発話を成立させている。132T「行っちゃおう。」は、Kの体験をTが追体験するような感じで説明している。Kは、131Kの終わりで手を合わせて「行く」という動作を加え、132Tの終わりで1回小さいうなずきをすることによって後の発話(132T)を承認している。こうした非言語行動については、4.3で詳述する。

本研究では、22件の談話から採った共同発話50例を分析対象とする⁷。共同発話が作り上げられる過程を参加者の立場と非言語行動という二つの側面から分析し、共同発話は、1) どの参加者の立場から作り上げるのか、2) どの参加者に、どのような行動によって共同発話として認められるのか、3) どのような非言語行動によって作り上げられるのか、を考察する。

2. 先行研究

英語の会話における共同発話の先行研究としては、Lerner(1991)の「複合的ターン構成単位 (compound turn-constructive unit)」、Ferrara(1992, 1994)の「共同産出 (joint production)」、Antaki, Diaz & Collins(1996)の「共同発話のフッティング (footing) とその承認・否定」等が挙げられる。

日本語の談話における共同発話の先行研究は、水谷(1993)の「共話」、Ono & Yoshida(1996)の「共同構成単位(co-construction)」、Szatrowski(2000, 印刷中)の「共同発話の使用場面」等がある。

Antaki, Diaz & Collins(1996)は、共同発話の先の発話者は、後の発話の内容と立場を承認したり、拒否したりするという。後の発話者の発話の内容と立場の承認は、1) 先の発話者が後の発話に賛同する発話、2) 先の発話者による後の発話の繰り返し、3) 先の発話者の後の発話に対するプラスの評価により行われ、拒否は、1) 非優先的なマーカート、2) 評価の回避によって行われるとしている。本研究では、日本語の共同発話の成立がどのように先の発話者に認められるのかについて分析する。ただし、ここでは先の発話者によって共同発話の成立が認められるかどうかには拘わらず、先の発話と後の発話とが組合わさって名詞句や節、単文、複文等になる場合は、共同発話として扱うことにする。共同発話が2発話からなる場合は、先の発話者が後の発話を確認する場合がほとんどであるが、第三者が認める場合もある。3発話以上では、最後の発話に先行する発話者かそれ以外の第三者によって共同発話の成立が認められる。

英語の談話における参加者の立場に関する研究には、Goffman(1981)、Levinson(1988)、Antaki, Diaz & Collins(1996)がある。日本語に関しては、南(1987)と熊谷(1997)が挙げられる。これらの研究における分類を検討した上で、筆者による新たな分類を提案したい。

Antaki, Diaz & Collins(1996)は、Goffman(1981)とLevinson(1988)の定義を踏まえ、「参加者の立場」を、1)「創始者(author)」「その場において、自分のために行動し、自分の発話の形式に責任をもつ話者」、2)「中継者(relayer)」「その場にはいるが、ただ単にほかの人の発話を中継し、その発話の形式にも動機にも責任がない話者」、3)「代弁者(spokesperson)」「ほかの人と共同して、発話の形式と動機に責任をもつ話者」の3つに分けている。

南(1987:67-68)は、「ある言語的コミュニケーションが成立するために関係する人間、または準じるものとして」、1) 送り手、2) 受け手(a.マトモの受け手、b.ワキの受け手)、3) 関係者(a.動作主、b.被動作主)の3つを挙げている。「マトモの受け手」は「直接の話し相手となる」のに対し、「ワキの受け手」は「直接の話し相手とはならないが、マトモの受け手のそばにいる」人だとしている。熊谷(1997:29)は、話し手を、1)「ももとの話し手(自身の発言としての発話)」と2)「見かけの話し手(伝言などを伝える仲介者、代弁者、口真似など)」に二分している。

以上の参加者の立場に関する先行研究は、参加者の立場を単に分類するに留まり、非言語行動の分析を含んでいないし、何によって「直接の話し相手」だと分かるのかも扱っていない。(1)のA、Bと(3)のKは、現時点において、自分のために行動し、自分の発話に責任を持つ話者であるため、Antaki, Diaz & Collins(1996)の「創始者」の立場、熊谷(1997)の「ももとの話し手」に当たる。しかし、(3)の共同発話を完了させる132Tでは、TはKの立場に立っているが、Kの発話を伝えるのではない。したがって、発話者自身(T)はその発話の動機に責任がないが、ほかの人の発話を中継はしていない。そのため、先行研究の分類には当てはまらない。

本研究では、南が受け手を「マトモの受け手」と「ワキの受け手」に分けたことから着想を得て、「情報提供者」と「協力者」をいずれも「マトモ」と「ワキ」に分け、1)「マトモの情報提供者」、2)「ワキの情報提供者」、3)「マトモの協力者」、4)「ワキの協力者」という参加者の新しい

分類を設けて分析する。「マトモの情報提供者・協力者」は自分のために行動し、自分の行動に責任をもつ参加者で、以下「情報提供者」と「協力者」と呼ぶことにする。「ワキの情報提供者・協力者」は現時点において発話するが、自分の発話に動機も責任もたず、他の参加者の立場から発話する参加者である。

この「マトモの情報提供者・協力者」「ワキの情報提供者・協力者」という新しい分類に基づいて、談話の相互行為における参加者の立場がどのように実現されるのかについて考察する。参加者は、談話の中で互いの立場を了解しているが、本研究はそれが談話の相互作用において実現される動的な過程について考察するものである。

3. 参加者の言語行動による共同発話の承認と参加者の立場（連携）

この節では、参加者の言語行動による共同発話の承認と参加者の立場（連携）について分析する。共同発話には、(3)のように、後の発話者が先の発話者の立場に立って終わらせる共同発話と、(4)～(6)のように、2人以上の参加者が連携し、他の参加者に対して何かを言う共同発話とがある。(3)は2人、(4)～(6)は3人以上の参加者からなる談話である。

(4)(5)では、複数の参加者が連携して、他の参加者と対立した意見を述べる例である。(4)は、ある家族の談話の例であるが、娘A、娘Yと母親Mの3人が連携して、父親を批判する発話をしている。

- | | | | | |
|-----|----|----------------------|---------------|--|
| (4) | 1Y | <u>なんかパパの言い方がねえ、</u> | 〈情報提供〉 | |
| | 2A | <u>もう嫌味//だから。</u> | 〈情報提供〉 | |
| | 3M | そう。嫌味だから。 | 〈同意〉 + 〈情報提供〉 | |
- (Jones 1990:72-3; 下線と右側の表記は筆者が付したもの)

3M「そう。」と2Aを繰り返す「嫌味だから。」という発話によって、母親Mが1Yと2Aの共同発話の成立を認めている。Y・A・Mの3人が個々に話す場合は、いずれも単なる情報提供者に過ぎない。しかし、同席する父親Fに3人がそれぞれの発話を向けていることから、Y・A・Mの3人が連携していることがわかる。(4)の右側に連携している参加者を○で囲んで示した。

(5)は、共同発話によって参加者が連携して一つの提案を出すという例である。参加者B・C・Sを含む10人のある会社の社員たちが、企画会議で近く開かれる予定のソフトウェアの展示会の打ち合わせをしている。展示会の来客用の名刺入れの箱の準備について、CとBが連携して必要ないという意見を述べている。

- | | | | | |
|-----|-----|----------------------------|-----------|--|
| (5) | 65C | <u>受付の人がこう言ってもらって、</u> | 〈感想・情報要求〉 | |
| | 66B | <u>もらって→、</u> | 〈情報要求〉 | |
| | 67B | <u>//しまっておいたらいけないんですか？</u> | 〈情報要求〉 | |
| | 68C | しまっておくのは平気なのかもしれないね？ | 〈感想〉 | |
| | 69S | ま、それでもいいと思うけど。 | 〈情報提供〉 | |
| | 70B | もらってしまうだけじゃだめですか？ | 〈情報要求〉 | |
- (桑原1996:10-11; 下線と右側の表記は筆者が付したもの)

(5) では、Cが68Cで67Bをパラフレーズして共同発話の成立を認めている。CとBが連携して、〈情報要求〉の共同発話を成立させる協力者となり、Sは情報提供者になる。

(4)(5)は、2人以上の参加者が同じ意見をもって連携して共同発話をしている例であるが、2人以上の参加者が知識や体験を共有する場合に、連携して共同発話を作ることもある。(6)は、雑談から採った例であるが、HとMと一緒に体験した「出来事(event)」に関する共有知識をもっているため、2人で連携して知識を持たないその他の参加者に説明している。

- (6) 1H あれだってヘルプ終わってからさ 〈情報提供〉
2H お茶して帰ろうかってゆってさ 〈情報提供〉
3M そうそうそう。 〈同意〉
4M ね、なんか夜中になっちゃったのよね 〈同意〉+〈情報提供・同意要求〉
- (H) 他の
(M) → 参加者
- (Ono & Yoshida 1996:123; 下線と右側の表記は筆者が付したもの)

HとMが連携して情報提供者となり、1H～2Hと4Mで共同発話を成立させ、他の参加者に過去の出来事を物語っている。

(4)～(6)の例は、すべてFerrara(1994)の「予測可能な発話完了」、つまり後の発話者が先の発話の命題の残りの部分が予測できる共同発話の例であるが、参加者が連携し、マトモな情報提供者(4)(6)・協力者(5)として発話のみからでは予測が可能な完了の場合にも不可能な場合にも共同発話を作ることがある。次節で非言語行動も併せて分析し、考察を行う。

4. 共同発話における参加者の非言語行動

ここでは、共同発話に伴う非言語行動を分析する。共同発話はどのような非言語行動によって作り上げられるのか、共同発話の成立を認める非言語行動はあるのか、非言語行動も含めてどのような参加者の立場が示されるのかを検討する。

4.1. 非言語行動の記述方法

本研究の談話資料では、参加者の1)頭の動き(うなずき)、2)視線、3)身体の動作という3つの非言語行動を記述する。そのために、対面の6談話から共同発話を24例(雑談2談話、12例;会社の会議3談話、9例;対談番組「徹子の部屋」1談話、3例)選んだ。今後の実証的研究の見通しを得ることが目的の本研究では、談話資料中の共同発話を網羅的に分析したわけではない。

1)「頭の動き」は、相づち的な発話を伴うものと実質的な発話を伴うものとに分ける。相づち的な発話を伴う「大きいうなずき」を参加者を示すアルファベットの太文字(ABCDKT)、「小さいうなずき」を小文字(abcdkt)、実質的な発話を伴う話者のうなずきをギリシャ文字(α β γ δ κ τ)で示し、それぞれ対応する発話の下段に記した⁸⁾。

例えば、(7)には、ギリシャ文字 β を「併注」の「併」の下に記したが、これは、Bが9Bの「併注」の「へ」を発話したと同時にうなずいたことを示している⁹⁾。頭の動きは、(7)のような1回だけのもとの(8)のような複数回繰り返すものがある。

(7) 9B 併注、を、
β

(8) 133K 3時間ぐらいかけて。{笑い}
k k k

2) 「視線」については、主にある参加者がほかの参加者の方に視線を向けている時に記し、各参加者の視線を同時に記す。矢印の向きで視線の方向を、アルファベット記号の位置で各参加者の位置を示し、発話の箇所矢印と参加者のアルファベット記号で視線の変化を記した。発話者の記号を○で囲み、視線が変化した参加者の記号に下線を引いた。参加者の顔がよく見えない場合は、参加者の記号に点線を引いた。(| は参加者が前方を向いていることを示す。)

(9) 131K じゃあ、どっかそっちの親父の会社のほうまで、
⊙→←T

(10) 150K もう、自分の世界に、{笑い}
⊙↘←T ⊙→←T

(9) は、矢印はKとTが視線を合わせていることを示している。この場合は、Tの顔がよく見えないので、Tの下に点線を引いてTの視線が推測によるものであることを示した。(10) では、150Kの「自分の世界に」を発話した時に、Kは斜め下を見、TはKの方を見ていると前後の場面から推定し、記した。次に、Kが笑うと同時に、Tの方へ視線を向ける。このように、視線の変化があった箇所に2人の参加者の視線が同時に示してある。

(11) 9B 併注、を、

| ⊙↘↓C | ⊙↓↘C
| A↑←D | A↑←D

4人の参加者による視線は、2人の対話の場合と同様に、左下から時計回りに左下A(男)、左上B(男)、右上C(女)、右下D(女)という順で、参加者の位置を示している。(11)の9Bの発話の下に記した図では、9B「併注、を、」の「へ」という音のところでA・B・Cの視線が、また、「を」と発話したところでB・Cの視線が変化するが、視線を示す矢印の方向から、Bが「併注」と言った時、AがB、BとCがD、DがAをそれぞれ見ており、「を」が発音されると同時に、BとCがAを見たということがわかる。

3) 「身体の動作」の開始と終了は、「体の大きい動作」を《 》、「手の動作」を []、「その他の動作(お辞儀等)」を 〈 〉で、それぞれ発話の中に示す。発話者以外の参加者の動作は、各発話の下段の [] 《 》 〈 〉の中に、その動作をした参加者の記号を記した。

(12)では、Bが2Bを発話しながら [] の下の1.~5.に示したような円を手で描き、また、手を止めたり、動かしたりしている。

(12) 2B [もっ、] [あの一き] [ちーんと膜が] [されてる] [と→、

1. 机の少し上で右掌を下に向けて円を描く。

2. 右手を止める。

3. 下線部で右手を上下に動かし、止める。

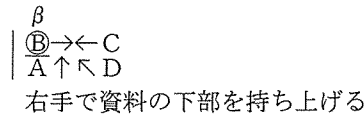
4. 右手を左右に振るように動かす。

5. 右手を机の少し上で止める。

(13)のように、うなずき・視線・動作が全て併記される場合もある。従来の各参加者の非言語

行動を別個に記した分析とは異なり、参加者全員の行動と視線を併記することで、談話における参加者の相互作用がより明確に把握できるようにした。

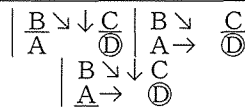
(13) 9B 一緒に見に行きま [しょう。



4.2. 先の発話者の非言語行動による共同発話の承認

(14) は、「4人の参加者による新入社員の仕事に関する説明の会話」の例である。C (20代の女性)はこの会社の新社員、A (中年の男性)はその上司でこの会議の司会者、B (中年の男性)はCの仕事の内容について主に説明している。この場面では、D (20代後半の女性)が保証料と納品についてBに質問しているが、1Dと2Bが共同発話を成立させている。3Dでは、2Bの動詞の繰り返しとDとCのうなずきによって共同発話の成立を認めている。(14)は、Ferrara(1994)の「要求される発話完了」、つまり先の発話者が単語の終わりをのばして発音した後、後の発話者に共同発話を完了するように要求する例である。

(14) 1D で、その時に保証料とのうひ、ま、据えつけー (情報要求)



=//は、
2B は、処理してます。 (情報提供)

$\begin{array}{c} B \quad B \\ \textcircled{B} \searrow C \\ \text{A} \rightarrow \leftarrow D \end{array}$
3D 処理は、//し、されてる、// (ということですね。) (確認)

$\begin{array}{ccc} D & D & D \quad D \\ C & C & C \quad c \quad c \\ & & B \searrow C \\ & & \text{A} \rightarrow \leftarrow \textcircled{D} \end{array}$
4B はい、 はい。 (同意)
B B

1Dの「で、その時に保証料とのうひ、ま、据えつけー//は」で、「据えつけ」の終わりの母音がのばされて発音されたところで、Bが2Bの始めて2回うなずきながら、「は、処理してます。」と答えている。次に、3Dで2Bの発話を繰り返している途中で、Dが4回、Cが5回うなずいて2Bの応答を確認しているが、4B「はい、はい。」で2回うなずいてBがDに同意している。(14)では、Dと共同発話を作り上げるBがDを見つめ続けるのに対し、Dは、2Bの答えと3Dの確認の発話の始めてBを見ている。また、上司のAは、1Dの途中からずっとDを見続けている。

(14)は、Bが情報提供者で、Dが協力者であるが、Bが後の発話(2B)を発する時に、先の発話者Dが後の発話者Bに視線を向けるという特徴がある。この視線によってBが「マトモの情報提供者」であるとわかる。Cは1DでDを少し見るが、その後視線を反らし、Dと同時に3DでうなずいてBに対する「ワキの協力者」となっている。

4.3. 「図像的 (iconic) な動作」から予測される後の発話

(15)～(17) は、共同発話の先の発話者による「図像的 (iconic) な動作」から予測できる内容を後の発話者が補うことによって、共同発話を成立させる例である¹⁰。「図像的 (iconic) な動作」とは、具体的な出来事や事物、動作を示す身ぶりである。動作と発話と一緒に一つ的首尾一貫した意味を表す場合と、動作と発話が補い合う場合とがある。

(15) は、前述の (3) の非言語行動の一部を示している。テレビの対談番組のゲスト K と司会者 T が 131K と 132T で共同発話を成立させたのを、K が 132T の終わりに小さくうなづくことで認めている¹¹。

(15)

図 1



図 2



図 1

図 2

131K じゃあ、 [どっかさそちの親父の会社のほうまで、] 〈情報提供〉

Ⓚ→←T

両手を合わせたまま首の前まで上げ、
二重下線部で前に動かす。

図 3



図 3

132T 行っちゃおう→.

K↘←ⓐ k

《K が両手を下ろす? (顔しか映っていない)》

《意志表示》

- 133K 3時間》[ぐらいかけて。]《{笑い} (情報提供)
 k k k
 ①→←T ①→←T
 両掌を合わせ、首の前まであげ、二重下線部で1回前に動かす。
 両手を下ろす?(顔しか映っていない)142Kまで
- 134T すーごい→, (感想)
 K? | ①
 (佐久間・杉戸・半澤編1997:共通資料30;非言語行動は筆者と鈴木が付したもの)

131Kの「会社」,「まで」を発話すると同時に、Kが合わせた両手を首の前あたりで2回前の方に動かし、「行く」という「図像的な動作」をしている(図1,図2)。この「図像的な動作」からもTが131Kを完了する部分を予測し、132Tで「行っちゃおう」と発話して131Kを完了させ、KとTの共同発話が成立している。132TでKの立場から情報提供をしたTが、「ワキの情報提供者」となっている。132Tに対してKは1回小さくうなずいて、133Kで「3時間ぐらいかけて」と言った後、また3回うなずくという非言語行動によって、共同発話の成立を認めている。Kは、131Kと133Kの終わりではTを見ているが、132TでTが共同発話を終わらせた時はTを見ていない(図3)。

このように、「マトモの参加者」である先の発話者(K)が、「ワキの参加者」である後の発話者(T)に視線を向けないことが、(15)~(18)ではすべて一貫している。

(16)は、(15)の後に続く談話である。

- (16) 146T 「坊ちゃん、どこ行くの?」とかって、聞いた人いない? (情報要求)
 K→←①
 K)《K右肘を右腿にのせたまま、頬づえをつく。
 左手を右膝にのせる。
- 147T そんな、い、//一生懸命こいでて、
 K→←①K→←①
- 148K [いや、]別に、 (情報提供)
 ①→←T
 右に首をかしげる
- 149T //別に→, (確認)

図4

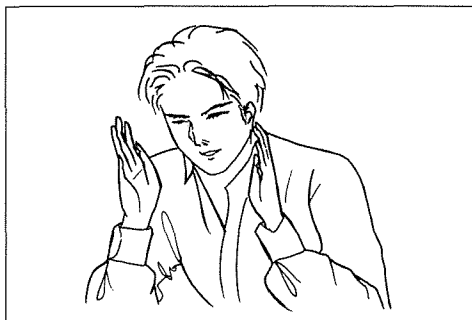


図5



図4

図5

150K もう、自分の》[世界に、][{笑い} (情報提供)

$\textcircled{K} \searrow \leftarrow T$

$\textcircled{K} \rightarrow \leftarrow T$

両手を顔の横から前に出す。掌内側。

両手を握りペダルをこぐように動かす

図6



図6

151T はいって。 (情報提供)

$\textcircled{K} \searrow \leftarrow \textcircled{T}$
K]

152T でも、よく迷子にならないで、行けましたねえ。 (感想)

$\textcircled{K} \mid \leftarrow \textcircled{T}$

《K両腕を両腿の上ののせ、手指を組む》

153K うん。》 (同意)

k

(佐久間・杉戸・半澤編1997：共通資料30；非言語行動は筆者と鈴木が付したもの)

Kは150Kの「もう、自分の世界に、」の「世」を発話すると同時に、両方の掌を内側にして顔の横から前に出し、「入って」という「図像的な動作」を行っている(図4)。このKの「図像的な動作」から150Kを完了する部分を予測したTが、151Tで「はいって。」と言って、KとTが共同発話を成立させている。(15)の132Tと同様に、151Tに対してKが1回小さくうなずき、共同発話の成立を認めた後、Tが152Tで感想を述べる。(16)では、Kが情報提供者で、151T以外のTの発話では、Tが協力者(情報要求・受容的発話機能)であるが、151TではTがKの立場から情報提供をし、「ワキの情報提供者」となっている。Kは、先の発話(150K)の終わりで両手を握り、笑うと同時にTを見る(図5)が、後の発話(151T)では、斜め下を見てペダルをこぐように手を動かしている(図6)。(16)は、(15)と同様、後の発話は「ワキの情報提供者」によって発話され、先の発話者は後の発話者に視線を向けていない。

(17)は、(14)と同じ談話の例であるが、新入社員CにBが会社の製品の効果を説明している場面である¹²。AがBの「図像的な動作」からBの発話を完了する部分を予測し、1B~3B、5Aで共同発話を成立させている。この共同発話は、Ferrara(1994)の「予測可能な発話完了」と「補助的

発話完了」の例に当たる。「補助的発話完了」とは、語彙面での補助であり、話し手の‘Uh（ええと）’やポーズ、‘Uh（ええと）’とポーズ両方の後に相手が必要とする語句を言ってあげるような場合である。

(17) 1B 実際に] [あののってるとね、] 〈情報提供〉

右手を机の少し上で止める

図 7



2B [もっ、] [あのーき] [ちーんと膜が] [されてる] [と→、]

机の少し上で右掌を下に向けて円を描く。

右手を止める。

二重下線部で右手を上下に動かし、止める。

右手を左右に振るよう動かす。

右手を机の少し上で止める。

図 7



図 8



図 8



3B もっと] [きれいな] [その、] [なんていうのか、]

| ③ ← C12

16 | A ↑ ↗ D12

机の少し上に右手で円を描く。

右手を止める。

右手を胸の前まで挙げ、人差し指で円を3周描く。

1周ごとに小さく描いていく。5Aまで。

4B あのーえー→、

C

| ③ ← C

16 | A ↑ ↗ D12

| ③ ← C12

16 | A ↑ ↗ D12

図 9



5A 同心//円。

| B ↙ C

16 | ③ ↑ ← D

〈自己〉

《情報提供》

図 9



図 10



図10

6B 円。] [] 〈情報提供〉

| ⑤ ← C

16 | A ↑ ⊞ D

B 右手を机の少し上で止める。

7B [と、 同心円] っていうの? 〈同意要求〉

β β β
| ⑤ → ← C | ⑤ → ← C 12

16 | A ↑ ⊞ D 12 | A ↑ ⊞ D
右手人差し指を少し下に動かす。

図 11



図11

8C はい。 〈共感〉

C C C
d d

9B [あのきれいなあの] [模様] [あの、] [なります。] 〈情報提供〉

d C β β
12 | ⑤ → ← C 12 | ⑤ → ← C 12 12 | ⑤ → ← C 12

12 | A ↑ ⊞ D 12 | A ↑ ⊞ D 12 | A ↑ ⊞ D

右手を机に近づけ、人差し指で円を描く。

机を指すように動かす。

右手を体に近づけ、机上に置く。

左手を前に伸ばす。

Bが説明している製品について2Bの「もっ、あのきち一んと膜がされてると→、」と言いだめるとき、机の少し上で右手で円を描く動作をする(図7)。3B「その、なんていうのか、」と4B「あの一え一→、」という発話から、Bが単語を思い出せないことがわかる。3Bと4Bと同時に、Bは、右手を胸の前まで挙げ、人差し指で円をだんだん小さくして、3回円を描く(図8)。この時、AがBの「図像的な動作」からBが言いたい語句を予測し、5Aで「同心円」と言う。それに対して、BがAの発話を6B「円。」と7B「と、同心円っていうの?」で5Aを繰り返しながら3回うなずき、1B~3Bと5Aの共同発話の成立を認めている。Bと共に共同発話を作り上げるAは、3B~7BでBの手を、また、7B~10CでBの机の前をずっと見続けている。一方、その間、BはAを見ずに、「同心円」という単語がわかった後の7B~10Cでも自分の手かCの方しか見ていない。Aが5Aで「同心円」と言った時、CとDは一瞬Aを見るが、すぐにBに視線を移す(図9, 図10)。

「ワキの情報提供者」(A)は「マトモの情報提供者」(B)に視線を向けるが、「マトモの情報提供者」(B)は「ワキの情報提供者」(A)を見ない。(15)~(17)では、後の発話は「ワキの情報提供者」によって発話されているが、その際、先の発話者が後の発話者に視線を向けないという共通した特徴がみられる。「マトモの情報提供者」が「ワキの情報提供者」を見た場合には、後者はもう「ワキの情報提供者」ではなく、「マトモの情報提供者」になってしまうのである。このように、Aが後の発話を発する時には、1) AがBの方へ視線を向けること、2) CとDは一時的にAを見るがBはAを見ないこと、Bが話す時には、3) BがAの方へ視線を向けないこと、4) CとDがBを見ることから、Aが「ワキの情報提供者」、Bが「マトモの情報提供者」だということがわかる。8Cで相づちを打って3回うなずくため、Cが「マトモの協力者」で、DもCとともに2回うなずくことで「ワキの協力者」となっている(図11)。

(17)では、Bが情報提供者で、Cが協力者になるが、5AではAが「ワキの情報提供者」、8Cと9BではDが「ワキの協力者」となる。3人以上の参加者による談話の共同発話を含む(17)のような話段では、実質的な発話と相づちやうなずきによって、複数の人が参加することになる。

4.4. 参加者の立場が変わる複数の共同発話からなる話段

(18)は(14)(15)と同じ談話の例であるが、会議の司会者Aが異なる課に属するBに「併注」について確認している場面である。AとDが4A~5Aと8Dで、BとDが9Bと10Dで、それぞれ共同発話を成立させている。前者は「補助的な発話完了」によって、Dが「ワキの協力者」となるが、後者は「予測可能な発話完了」によってDがBと連携して共同発話を成立させている¹³。

(18) 1B だから安い機械でも、) (情報提供)

β

2	ⓑ↓	C
	A	D

2B 〈高い機械でも、

β

両手を肘掛けにのせ、座りなおす。

3B 基本的に、) 〈特になんにも余分な作業がない限り〉 =

β

| ⊕ ↓ C
| A D

右手で上着を直す。

= 《は、80万円。

A β

2 | ⊕ ↓ C

| A D

Ⅲ両肘から先を肘掛けの上へのせ、腹の前で両手指を組む。

4A それ1人1人受注一あげた時に、

〈情報要求〉

| B ↓ C

| ⊕ D

B》《BⅢのまま、背もたれによりかかる。

5A 80〈万円の、

| B C

8 | ⊕ ↑ D

右手ボールペンを持ったまま、頭をさわる。

6B はい。

〈同意〉

B

図12



7A えーっと――、

〈自己〉

図 12



図 13

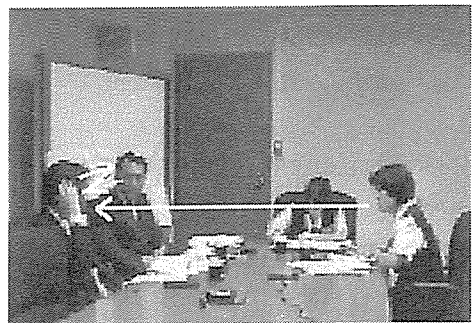


図13



8D 併注。

《情報要求》

| B ↓ C

8 | A ↑ ← ⊕

図 14



図 15



図14 図15



9B 併注、 を、
β

〈情報提供〉

| ⊙ ↘ ↓ C | ⊙ ↓ ↙ C
| A ↑ ← D | A ↑ ← D

10D かけ くる。

《情報提供》

| B ↓ ↙ C
| A ↑ ← ⊙
左手で額左側を触る。

図16



11A へいちゅうかける。)

〈確認〉

α α α α
頭触り終わり

図 16



図 17

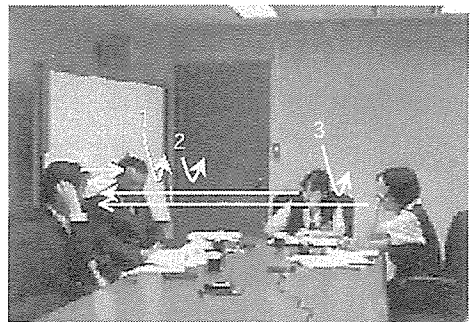


図17



12B

はい。
B b
C

〈同意〉

13D し、仕入れだけの。

〈確認〉

a a a

B ↘	C	B ↘	C
A → ↘	ⓐ	A ↘	ⓐ

14B 仕入れ へいちゅうのね?

〈情報提供〉

B b

ⓑ	C	ⓑ ↘	C	2	ⓑ ↓	C
A → ↘	ⓓ	A ↘	ⓓ		A ←	ⓓ

D終わり)

15A わかりました。

〈終了〉

2	B ↓	C
	ⓐ	ⓓ

図 18



図18



16A 《そっかー。

〈終了〉

B	C
ⓐ	ⓓ

ボールペンを立てて、口元に。上を向く。

同一の談話の中で、参加者Dは、「ワキの協力者」、Bと連携する「マトモの情報提供者」、「マトモの協力者」という三つの立場をとっている。Aが4A~5Aで「それ1人1人受注一あげた時に、80万円の、」と言ったのに続けて、「併注をかけるんですか。」と言うべきところで「併注」という語句が浮かばず、7Aで「えーつとー、」と言う(図12)。それに対して、DがAを見ながら8Dで「併注」と言って、共同発話を作り上げる「ワキの協力者」となる(図13)。次に、Bがうなずいて、9B「併注、を」と8Dを繰り返すことによって4A~5Aと8Dによる第1の共同発話の成立を認めている。9BでBとCがDに一瞬視線を向けるが、9Bの終わりの「を」を発すると同時に、BとCがAを見る(図14、図15)。Dは8Dから12BまでずっとAを見続けているが、Aはその間Dを見ずに、Bの方を見ている(図13~図17)。この視線の有様からも、Dが「ワキの協力者」で、Aが「協力者」だということがわかる。

9B「併注、を」に続き、Dが10D「かける」と言うことによって、BとDが第2の共同発話を成立させている。9Bと10Dの共同発話では、DがBと連携して「情報提供者」となっている。最後に

Aが11A「へいちゅうをかける」と9Bと10Dの発話を繰り返しながら4回小さくうなずき、BとDの共同発話の成立を認めている(図16)。さらに、12BでBが相づちと同時に2回うなずくことで同意を示した後、Cがうなずいて、「ワキの情報提供者」となる(図17)。Cが意図的にうなずくというよりも、むしろBの相づちとうなずきにつられたように見えることから、Aに同意している情報提供者Bの「ワキの情報提供者」として考えられる。

Dが13DでBを見て、「し、仕入れだけの。」という〈確認〉の発話を発することで「協力者」となる。Bが14B「仕入れへいちゅうのね?」と言った後、BとDがAに視線を向け、Aが15A「わかりました。」と16A「そっかー。」という〈終了の注目表示〉の発話を発したことによって(18)の話段を終わらせている。四人の参加者が視線を反らしていることからこの話段が終わったことがわかる(ザトラウスキー1998)(図18)。

4.5. 先の発話者によって認められない共同発話

(19)も、(14)(17)(18)と同じ談話の例であるが、Cと異なる課に属する中年男性社員Bが新入社員Cに会社の製品を作る工場に行くように誘っている。(19)では、1B・3Bと5Aで共同発話が成立している¹⁴。しかし、(14)~(18)とは異なり、先の発話者Bが共同発話の成立を認めず、1B・3Bの内容を繰り返して6B~9Bの文を単独で完了している。

(19) 1B まあ物としてはまたチャンスがありましたらね、 (共同行為要求)

$\begin{array}{c} \textcircled{B} \quad C \\ \underline{A} \uparrow \curvearrowright \underline{D} \end{array}$	$\begin{array}{c} \textcircled{B} \quad \leftarrow C \\ \underline{A} \uparrow \curvearrowright \underline{D} \end{array}$	$8 \begin{array}{c} \textcircled{B} \quad \leftarrow C \\ \underline{A} \uparrow \curvearrowright \underline{D} \end{array}$	$8 \begin{array}{c} \textcircled{B} \rightarrow \leftarrow C \\ \underline{A} \uparrow \curvearrowright \underline{D} \end{array}$
---	--	--	--

2C はい→. 〈継続〉
C

3B 1度その] [一、XXXX] [Xっていうところに、

$8 \begin{array}{c} \textcircled{B} \quad \leftarrow C \\ \underline{A} \uparrow \curvearrowright \underline{D} \end{array}$	右手を前方に伸ばし、左手で資料の頁をめくる。 右手は机上。
--	----------------------------------

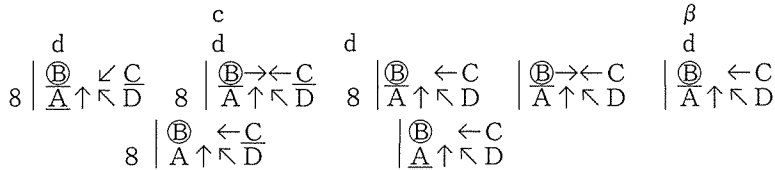
4A あー、 〈承認〉
A

5A 見てもらえばいいですね? 〈確認〉

α

$\begin{array}{c} B \quad \leftarrow C \\ \underline{A} \uparrow \curvearrowright \underline{D} \end{array}$	B]
--	----

6B [あの一 物が、] [あの一、 置いてありますんで、] (情報提供)



右手を2回細かく下にたたくように動かす。
 掌下。左肘から先は肘掛けの上におく。

机上左側にあるプリントを右手で触る。
 二重下線部で2回プリントを軽くたたくように動かす。掌下。左肘から先は肘掛けの上。

7C はい。 (継続)
 C C c
 d d

8B チャンスが] [あつたら] (共同行為要求)
 右手をプリントから少し浮かせ、二重下線部で細かくプリントをたたくように動かす。

9B 一緒に見に行きま] [しょう。 (共同行為要求)

$$\begin{array}{c} \beta \\ \textcircled{B} \rightarrow \leftarrow C \\ \underline{A} \uparrow \searrow D \end{array}$$

 右手で資料の下部を持ち上げる。

10C はい。 (共感)
 C c c
 B]

Bが3B「一度その一、XXXXXっていうところに」と言ったところで、右手を前方に伸ばしている。Aが3Bを完了する部分を予測し、4A~5A「あー、見てもらえばいいですね?」と言っている。Cは5AでAを見ているが、BとDはAを見ず、(14)(17)(18)のような後の発話の繰り返しとうなずきや、(15)(16)のようなうなずきはしていない。このことからBが5Aの発話を、3Bを完了する部分として認めていないことがわかる。Cは、Bが6Bの始めて「あの一」と発話することによって自分の視線が要求されたかのようにすぐにBに視線を向ける。Aも6Bの「物が、あの一」により自分の視線が要求されたかのようにすぐ後にBに視線を向ける¹⁵。

Bは、5Aの発話を無視したように、1B「まあ物としてはまたチャンスがありましたらね、」を、6B「あの一物が、あの一、置いてありますんで」と8B「チャンスがあつたら」と自分の発話をパラフレーズしてから、9B「一緒に見に行きましょう。」とCを勧誘する。5A「見てもらえばいいですね?」は9Bと内容的に類似しているのに、1B・3Bと5Aの共同発話の後の発話としてBが認めていない。これは先の発話者が共同発話の成立を認めない例である。

(19)では、Bが「情報提供者」となるが、2C・7C・10Cでうなずきながら相づちを打つCは「協力者」になり、Dは、ずっとBを見続けて6Bと7Cでうなずいていることから、「ワキの協力者」となっている。5Aでは、Aが〈確認〉の発話を発することで、「協力者」となっている。

5. 結論

本研究では、日本語の談話の共同発話に関連して、参加者の立場の種類、言語行動と非言語行動による参加の仕方、参加の意味等の問題を考察した。三人以上の参加者による談話の方が、様々な参加の仕方を可能にするため、複雑な様相を呈することになる。談話における参加者の立場を示す言語行動と非言語行動の複雑な面が浮かび上がってきた。

さらに、参加者の立場に関する従来の研究では、聞き手・話し手のように参加者の立場を実際の談話のやりとりとは別に分類して、固定して捉える面があった。これに対して、本研究では、参加者が非言語行動を含む相互作用の中でそれぞれの立場をどのように理解し、また、どのように参加者の立場を実現するかを分析した。従来の分類を検討して談話のダイナミズムのほかに、参加者の立場が談話の参加者間の相互作用の中で作り上げられていくものだということが明らかになった。

表1 共同発話における参加者の立場

先の発話者	後の発話者			
	情報提供者		協力者	
	マトモ	ワキ	マトモ	ワキ
マトモの情報提供者	(4) (6) (18b)	(15) (16) (17)	(1) (19)	
マトモの協力者	(14)		(5)	(18a)

本研究では、共同発話を参加者の立場の面から考察した。その結果をまとめると表1のようになる。南(1987)の「マトモの受け手」「ワキの受け手」の概念を発展させて、「マトモの情報提供者」と「ワキの情報提供者」、「マトモの協力者」と「ワキの協力者」という4種の参加者を区別することにより、共同発話における参加者の立場が説明できた。先の発話者と後の発話者が自分の立場から発話する場合、両者ともがマトモの参加者になる。複数の参加者が連携して、〈情報提供〉及び〈情報要求〉の発話によって共同発話を成立させる場合は、連携する参加者がそれぞれ「マトモの情報提供者」及び「マトモの協力者」となる(表1の二重線で囲まれた部分)。先の発話者の立場で後の発話者が終わらせる共同発話においては、先の発話者が「マトモの参加者」で、後の発話者は「ワキの参加者」になる。これらの参加者の立場による分類を設け、談話の相互作用の中で非言語行動によってどのように参加者の立場が理解できるのかについても考察した。

従来の主に言語行動に注目して分析した談話の研究では、「実質的な発話」と「相づち的な発話」は比較的区別しやすかったが、本研究のように、非言語行動も含めて分析する場合には、「実質的な行動」と「相づち的な行動」との境界が曖昧になることもある。「実質的な発話」に伴ううなずきと「相づち的な発話」に伴ううなずきは、一概に「相づち的なもの」として扱えない面もあり、「実質的な発話」の意味を補う身体的な動作も見られた。

さらに、本研究における「ワキの情報提供者」等による行動から、聞き手の役割はかなり能動的なものとして考えられる。このことから、聞き手と話し手の間のダイナミズムが浮かび上がってきた。従来の聞き手に関する研究では、聞き手は発話せずに、うなずきや身体的動作、視線等

によってのみ談話に参加するとされてきたが、「ワキの情報提供者」や「ワキの協力者」のように、積極的に談話に関わる面もあるということがわかった。本研究では、聞き手の行動の重要性や複雑さが明瞭になった。しかし、話し手・聞き手という二分法による「聞き手性」に代わる「参加者性 (participantship)」が参加者の相互作用の中でどのように作り上げられていくのかをさらに考察する必要があると思われる。

共同発話における非言語行動の分析によって、後の発話者が先の発話者の「図像的な動作」から発話を完了する部分を予測し、共同発話を成立させることが明らかになった。また、日本語の共同発話の成立を先の発話者が認める行動としては、後の発話の繰り返しや同意のほか、うなずきが多く用いられること、共同発話の成立を認めない行動としては、後の発話者が後の発話を発話した後、先の発話者が先の発話を繰り返して単独でその発話を完了することもあった。

先の発話者の立場に立って発話する後の発話者が「ワキの参加者」であるということが、談話の参加者の非言語行動、特に視線の変化を分析することによって明らかになった。後の発話者は先の発話者に視線を向けるが、先の発話者は後の発話者には視線を向けない。また、共同発話を成立させる発話者以外の参加者は後の発話者に一瞬視線を向けるが、すぐに先の発話者に視線を向けることから、先の発話者が「マトモの参加者」で、後の発話者が「ワキの参加者」であることが確かめられた。さらに、複数の参加者の連携による共同発話の場合は、後の発話者が先の発話者以外の参加者にも視線を向けるということが観察された。

今後の課題としては、共同発話を成立させる以外に、「ワキの参加者」がどのような役割を果たしているのか、参加者の力関係において、どの参加者が「ワキの情報提供者」「ワキの協力者」になり得るのかを解明する必要がある。さらに、共同発話を作り上げる各参加者の立場や非言語行動の特徴を分析するために、より多くの資料を検討し、共同発話が参加者の人数や種類、談話のジャンル、談話の内容、談話全体の目的（「活動 (activity)」）によって、どのような条件の下に起こりやすいのか等について分析する必要がある。

談話の単位としては、他者の発話によって区分される「ターン」の他に、音声面の特徴から区分される単位、Goodwin(1981)による「注視の要求—要求受け入れ」という視線による単位、談話の参加者の目的による話題、発話機能、音声面の特徴から認定される「話段」等、様々な言語・非言語行動に基づく単位がある。これらの単位の談話における機能や単位相互の関係等を分析する必要がある。日本語の談話における「共同発話」は、「話段」という単位、またはその一部に当たるが、本研究で新しく設けた参加者の立場や非言語行動の分析によって、「話段」のどのような面が明らかになるのかについても、今後の課題として残されている。

付 記

本研究は、平成9年7月から平成10年9月にかけて「日本語コミュニケーション能力に関する国際共同研究」の招聘研究員として国立国語研究所に滞在し、まとめた研究の一部です。本研究に関して貴重な助言を賜った早稲田大学の佐久間まゆみ教授、資料作成にご協力いただいた鈴木香子氏、唐津麻理子氏、尾形隆彦氏、『日本語科学』の査読者諸氏に心より感謝申し上げます。

注

1 発話機能は〈 〉, 「ワキの参加者」になって共同発話の先の発話者の立場に立って終わらせる発話機能は《 》で示す。筆者が収集した資料の文字化には, 以下の表記方法を用いた。

// //の後の発話が次の番号の発話と同時に発せられたことを示す。

(0.4) ()の中の数字は10分の1秒単位で表示される沈黙の長さであり, 例えば, (0.4)は, 0.4秒の沈黙を示す。

— マイナス印の前の音節が長く延ばされており, -の数が多いほど, 長く発せられたことを示す。

? 疑問符ではなく, 上昇のイントネーションを示す。

。 下降のイントネーションで文が終了することを示す。

、 ごく短い沈黙, あるいはさらに文が続く可能性がある場合の「名詞句・副詞・従属節」等の後に記す。

→, 発話が文の途中で, 平板のイントネーションで終わっていることを示す。

→. 平板のイントネーションで文が終了していることを示す。

() ()の中の発話が記録上不明瞭な発話であることを示す。

== 1発話を複数の行にわたって表記する場合, 発話番号を変えずに, 前の部分の終わりとして次行の始めに「=」を記す。

引用例の場合は, 可能な限り上記の表記方法に書き直した。資料の文字化の方法・表記等の詳細は, ザトラウスキー (1993別冊: 2~4) を参照。

2 「ターン」は, 文・節・句などの統語上の要素, イントネーション, トーン, ピッチのような韻律上の要素等の様々な特徴をもつ「ターン構成単位 (TCU)」からなり, 会話の参加者によって構成される (Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)。

3 (2) に示した〈談話表示〉は談話の展開の仕方を述べる発話であり, 接続表現や「話が変わるけどね?」のようなメタ言語行動を示す発話が含まれる。〈注目表示〉とは相手の発話を認識する発話であり, 〈同意要求〉に対する答えも含む発話機能である (国立国語研究所1987)。他の発話機能の定義については, ザトラウスキー (1991, 1993), 「提供・表示」, 「要求」, 「受容」の発話機能の違いについては, ザトラウスキー (1997) を参照のこと。

4 例えば, 勧誘の談話では, 勧誘者と被勧誘者が協力して互いに (2) の左側の発話機能と右側の発話機能を組合わせて, 「勧誘の話段」と「応答の話段」を作り上げる。「勧誘の話段」では, 勧誘者が情報提供者として左側の発話機能を用い, 被勧誘者は協力者として右側の機能を用いる。また, 「応答の話段」では, それぞれの参加者が用いる発話機能が逆に入れ替わる。ただし「応答の話段」では, 被勧誘者は〈共同行為要求〉を用いない。

5 「実質的な発話」の定義は, 杉戸 (1987:88) に従う。

6 受容的発話機能は (2) の⑩⑪に当たる。

7 本研究の資料 (22談話, 50例) は, 筆者が分析したもの (13談話, 35例) と他の論文からの引用例 (9談話, 15例) であるが, その内訳は以下に示す通りである。

A. 電話による談話 [7談話, 11例] (参加者はすべて二人)

1. 雑談 [2談話, 2例]

2. 勧誘の談話 [5談話, 9例]

B. 対面の談話 [15談話, 39例]

1. 雑談 [10談話, 26例]

- a. 友人同士 [8 談話, 24例] (二人が [2 談話, 12例]; 三人以上が [1 談話, 3 例]; 参加者数不明が [5 談話, 9 例])
 - b. 家族 (子供二人とその父・母親) [1 談話, 1 例]
 - c. 先生 (一人) と学生 (二人) [1 談話, 1 例]
2. 会議 [4 談話, 10例] (すべて二人以上)
- a. 国会の議会 [1 談話, 1 例]
 - b. 会社 [3 談話, 9 例]
3. 対談番組「徹子の部屋」[1 談話, 3 例] (司会者一人, ゲスト一人と視聴者)

1991年7月29日(月)放映分(テレビ朝日)。司会は黒柳徹子, ゲストは岡本健一。

本研究は, 分析した資料の例が少ないため, 実証的な研究というよりも, 理論的な研究を目的としている。それぞれの談話からすべての例ではなく, 代表的なものしか選んでいないため, 各談話の発話数や時間数は示さない。また, 他の研究からの引用例の時間数は, 不明である。

- 8 「相づち的な発話」の定義は杉戸(1987:88)に従う。うなずきと相づち, 実質的な発話を伴ううなずきと相づち的な発話を伴ううなずきを区別し, うなずきを相づちと呼ばないことは杉戸(1989)とは異なる点である。実質的な発話を伴う発話者のうなずきは, 大きいものがほとんどであったため, 大小の区別をしない。
- 9 資料は読みやすくするために, 原則として漢字仮名まじり文で文字化した。非言語行動は, 文字化した発話の漢字の読みの最初のモーラと一致した場合 (例えば「併」の「へ」) には漢字の下に, 後のモーラと一致した場合 (例えば「併」の「い」) には, 漢字をひらがなで表した下段に示す。「併注」は, おそらく会社の隠語であり, 併せて注文するという意味であろう。
- 10 「図像的 (iconic) な動作」は McNeill(1992)の分類枠組みからの援用であるが, 本研究の分析は, 談話の相互作用にあまり関心がない McNeill の研究の理論的背景とは異なっている。「図像的 (iconic) な動作」と発話の予測可能性については Emmett(1998)を参照。
- 11 「徹子の部屋」のデータ利用については, 番組の制作担当者の許諾を得た。また, 会議の談話については, 学会誌等の研究発表を目的に文字化資料とビデオテープの映像の一部を使用することについて, 参加者の許可を得ている。図 1~18では, 黒い矢印が手の動作を示し, 白い矢印が視線を, 大きいフックによる矢印が大きいうなずきを, 小さいフックによる矢印が小さいうなずきを示す。
- 12 (17) の視線の図では, 12がBの机の前, 16がBのすぐ前を示す。
- 13 (18) の視線の図では, 2がAのすぐ前, 8はBとCの机の前を示す。
- 14 5Aを3Bに直接つなげると文法的に納まりが悪くなるが, 「一度その一XXXXXっていうところに, 連れていって, 見てもらえばいいですね?」のように下線を引いた部分を補って考えれば, 共同発話が成立する。
- 15 Goodwin(1981)は, 英語の 'uh (ええと, あのー)' のような「言い直し (restart)」によって, 他の参加者の視線を要求することがあるという。英語の会話では, 話し手が聞き手を見た時に, 聞き手も話し手を見ることが好ましいが, 話し手がポーズを置いてから聞き手に視線を向け, その時に聞き手が話し手を見ていない場合は, 'uh (ええと)' のような「言い直し」を用いて聞き手の視線を要求することがあるとしている。

引用参考文献

- Antaki, Charles, Felix Diaz and Alan F. Collins (1996) Keeping your footing: Conversational completion in three-part sequences. *Journal of Pragmatics* 25 : 151-71.
- Bakhtin, M.M. (1952-53/1988) 「言葉のジャンル」(新谷敬三郎, 伊東一郎, 佐々木寛訳『言葉対話テキスト』バフチン著作集8) 新時代社
- Emmett, Keiko (1998) Projection of talk using language, intonation, deictic and iconic gestures and other body movements, *Japanese/Korean Linguistics* 7 : 17-30.
- Ferrara, Kathleen (1992) The interactive achievement of a sentence: Joint productions in therapeutic discourse. *Discourse Processes* 15 : 207-228.
- (1994) *Therapeutic ways with words*. Oxford: Oxford University Press.
- Goffman, Erving (1981) *Forms of talk*. Oxford: Blackwell.
- Goodwin, Charles (1981) *Conversational organization*. New York: Academic Press.
- Heath, C. and P. Luff (1996) Convergent activities: Line control and passenger information on the London underground. Y. Engestrom and D. Middleton (eds.) *Cognition and communication at work*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jones, Kimberly (1990) *Conflict in Japanese conversation*. University of Michigan: unpublished Ph.D. dissertation.
- (in press) *The myth of harmony: Conflict discourse in Japanese*. Norwood : Ablex.
- 国立国語研究所 (1987) 『日本語教育映画基礎編 総合文型表』日本シネセル
- 熊谷 智子 (1997) 「はたらきかけのやりとりとしての会話」茂呂雄二編『対話と知』新曜社
- 桑原 和子 (1996) 「日本語の『提案』の談話の構造分析」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』2号
- Lerner, Gene H. (1991) On the syntax of sentences-in-progress. *Language in Society* 20 : 441-458.
- Levinson, Stephen (1988) Putting linguistics on a proper footing: Explorations in Goffman's concepts of participation. Paul Drew and A. Wootton (eds.) *Erving Goffman: Exploring the interaction order*. 161-227. Oxford: Polity Press.
- McNeill, David (1992) *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. Chicago: Chicago University Press.
- 南 不二男 (1987) 『敬語』岩波新書
- 水谷 信子 (1993) 「『共話』から『対話』へ」『日本語学』12巻4号, 明治書院
- 茂呂 雄二 (1999) 『具体性のヴィゴツキー』金子書房
- Ono, Tsuyoshi and Eri Yoshida (1996) A study of co-construction in Japanese: We don't "finish each other's sentences." Noriko Akatsuka, Shoichi Iwasaki and Susan Strauss (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 5 : 115-130. Stanford: CSLI.
- Sacks, Harvey, Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. *Language* 50.4 : 696-735.
- 佐久間 まゆみ・杉戸 清樹・半澤 幹一編 (1997) 『文章・談話のしくみ』おうふう
- 杉戸 清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相——座談資料の分析』国立国語研究所報告92, 三省堂
- (1989) 「ことばのあいづちと身振りのあいづち 一談話行動における非言語的表現一」

- 『日本語教育』67号, 日本語教育学会
ザトラウスキー, ポリー (1991) 「会話における『単位』について——『話段』の提案」『日本語学』
10巻10号, 明治書院
—— (1993) 『日本語の談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察——』くろしお出版
—— (1997) 「かかわりあい」佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編『文章・談話のしくみ』
おうふう
—— (1998) 「初対面における話題を作り上げる言語・非言語行動」社会言語科学会第2回研究
発表大会予稿集, 京都大学
Szatrowski, Polly (2000, 印刷中) When do Japanese speakers co-construct utterances?
Mari Noda and Patricia Wetzels (eds.) *Language in culture*. Tokyo: Tuttle.

(投稿受理日: 1999年7月1日)

(改稿受理日: 1999年9月27日)

ポリー・ザトラウスキー (Polly Szatrowski)

University of Minnesota-Japanese

190 Klæber Ct.

Minneapolis, MN 55455 USA

Relation between participant status and verbal/nonverbal behavior in co-construction

Polly SZATROWSKI
University of Minnesota

Keywords

participant status, nonverbal behavior, co-construction,
waki 'assistant' information presenter, *waki* 'assistant' supporting participant

Abstract

Co-construction refers to the creation of a relative clause, clause, sentence or complex sentence by 2 or more participants. Based on an analysis of 50 examples of co-construction used in actual Japanese conversations, I address the following questions: 1) on whose footing are co-constructions created, 2) how and by whom are co-constructions ratified, 3) how is nonverbal behavior used to create co-constructions. I demonstrate that nonverbal behavior influences co-construction because participants can project the end of an utterance from the speaker's iconic movements, and co-constructions are ratified by repetition of the end of the co-construction, agreements and head nods. By replacing the traditional speaker/hearer dichotomy with a new classification based on ratified vs. *waki* 'assistant' information presenting participants and supporting participants, which I identified based on the utterance functions and gaze, I was able to elucidate new complexities in the interaction among conversational participants.